

聖書から見た多神教

第1回 なぜ多神教と一神教の比較が必要なのか？

1. 多神教が「寛容」や「多様性」の象徴とみなされる現代

現代の日本社会では、多神教的な価値観が自然な前提として受け入れられる傾向があります。

たとえば、「どの神様も認めれば平和になる」「多神教は寛容で、一神教は排他的」という主張は、多くの人にとって直感的で理解しやすい印象を与えます。

宗教にそれほど関心のない人々にとっても、多神教は"多様性の象徴"として評価され、一神教は"排他性の象徴"として語られることが少なくありません。

しかし、こうしたイメージだけで世界観を判断してしまうと、私たちは非常に重要な点を見落とすこととなります。

なぜなら、各宗教の世界観は、「神の数の違い」以上に、善と悪をどう理解するかという前提が背後にあり、それが社会や人間の生き方の核心部分を形作ってきたからです。

歴史を見ても、思想を見ても、そして人間の生き方そのものを考えても、善と悪の理解は避けて通れないテーマであり、その前提の違いは、社会の方向性にも大きな影響を与えてきました。

2. 本シリーズが扱う核心：善と悪の起源と目的論

本シリーズが扱うのは、単なる宗教比較ではありません。

- 善と悪はどこから来たのか
- 悪は根絶できるのか
- 人生や社会の目的とは何か

という、人類が共有する根源的な問いです。

そして、これらの問いへの答えは、その宗教が善と悪をどのように位置付けているかによって、まったく異なるものになります。

本シリーズでは、聖書的世界観と多神教的世界観という二つの枠組みを比較し、両者の前提と結論がいかに異なり、どのような生き方を導くのかを明らかにしていきます。

3. 聖書が示す善と悪の前提—創造時に悪は存在しなかった

聖書は、創造の時点では悪が存在しなかったと明言しています。

神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。
(創世記1章31節)

これは単なる創造物語ではなく、聖書の世界観を形作る根本的な前提であり、悪は本質的要素ではなく、後から入り込んだ異常な状態であるという理解を示しています。

つまり、悪は世界の構造に組み込まれておらず、創造の目的に含まれていなかったという位置づけです。

4. 多神教の前提—善と悪の共存

これに対して多神教では、善神と悪神が初めから共に存在し、それぞれが世界の秩序を形作る役割を担うと考えます。

ここでは、善と悪は構造的に共存し、どちらも世界の維持に必要な存在とみなされます。この違いは、単なる神話設定ではありません。

世界の成り立ちをどう理解するかという根本が異なるため、人生観、倫理観、歴史観、救いの理解も、すべて別方向に展開していくのです。

5. 聖書が示す悪の本質—"創造から外れた状態"

聖書は、悪が創造の一部ではなく、後から"入り込んだ"ものとして説明します。

イエスは弟子たちに向かって、「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」(ヨハネ福音書15章5節)と語りました。

これは、善を保って生きることが神との関係の中でのみ可能であることを示す言葉です。神との断絶こそが、人間が善を保てなくなる状態——すなわち悪の生じる根本原因——として、聖書は理解しているのです。

したがって、悪とは、神との関係が断たれた結果として発生する異常な状態であり、創造の構造的要素ではないのです。

この理解があるからこそ、聖書は「悪は根絶可能である」と語ることができます。

6. 多神教が調和を最重要視せざるを得ない理由

一方、多神教では、悪は世界の構成要素の一部であり、善と共に初めから存在するものとされます。

そのため、多神教における中心課題は、悪の排除ではなく、善と悪の均衡を保つこととなります。

この世界観のもとでは、

- 秩序と混沌
- 光と影
- 創造と破壊

といった対立要素のバランスが、世界秩序の維持に不可欠とされ、悪もまた必要な存在として扱われるのです。

7. 調和思想の利点と限界—平時は安定、乱世では機能不全

調和を重んじる思想は、平穏な社会においては一定の安定をもたらします。

しかし、乱世や深刻な危機に直面すると、問題の根本解決ではなく、調整に終始してしまい、悪の増大を止められないという重大な限界を持ちます。

たとえば、古代ローマが北方民族の侵攻に直面した際、宗教的には多神教的均衡の回復を図りながらも、根本的な国家改革には踏み切れず、崩壊を防ぎきれなかったことは、この限界を示す歴史的な一例です。

一方、聖書は、悪が後発的な逸脱であると理解するため、悪は克服され、創造本来の姿に回復できるという希望が成立します。

この違いが救いの理解に決定的な相違を生むのです。

8. 歴史観の違い—循環か、完成へ向かう線形か

多神教：歴史は循環する。

聖書：歴史は創造 → 墮落 → 回復 → 完成の線形構造。

循環思想では、悪が永遠に続き、同じ問題が繰り返される前提が置かれます。

これに対し聖書的歴史観では、悪が取り除かれ、創造目的が完成するという終末的希望が存在します。

このように、多神教の世界観では、悪が永遠に存在する前提があるため、根本的な救い（悪の完全除去）という発想が成立しません。

その結果、人生や社会の問題も「調整」「バランス回復」にとどまり、根本解決が追求されにくくなります。

9. 聖書が示す希望—悪の根絶と創造目的の完成

聖書の世界観は、最後に悪が滅び、創造の目的が完成するという希望を掲げます。

もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである。（ヨハネの黙示録 21 章 4 節）

最終的に悪が永遠に取り除かれた世界が示されているのです。この確信が、信者に積極的な行動原理を与えます。

10. 本シリーズの目的

本シリーズの目的は、多神教を批判することではなく、それぞれの世界観がもつ善悪の前提が、どのように人生・社会・歴史の理解を形成するかを明確にすることにあります。

そのうえで、多神教の限界（悪の永続性・調和第一主義）と、聖書が示す希望（悪の根絶・創造目的の完成）を比較し、世界観が人生の方向性を決定するという重大なテーマを扱っていきます。

第2回 多神教における善と悪の原初構造

1. 多神教に共通する基本構造—善と悪の"初期共存"

多神教の世界観を詳しく見ていくと、文化や地域が異なっても、驚くほど共通した特徴が存在します。

その最も根本的なものが、善と悪が創世の段階から共存しているという構造です。

これは、単なる神話上の設定ではなく、善悪観、倫理観、歴史観の形成に深く関わっています。

たとえば、ギリシャ神話では、オリュンポスの神々が善を担う存在である一方、タイタンや巨人族、冥界の勢力が破壊や混乱を象徴する存在として登場します。

バビロニア神話では、創世において、混沌の海の女神ティアマトが存在し、彼女の破壊的な力が世界の根源に組み込まれています。

ヒンドゥーにおいても、デーヴァ（神的存在）とアスラ（反神的存在）の対立が語られており、両者の闘争が宇宙の根本的な緊張として繰り返し描かれています。

ヴェーダ以来の文献においてこの対立は重要なモチーフであり、破壊的な力が宇宙構造の一部として組み込まれているという理解を示しています。

これらに共通するのは、善の勢力と悪の勢力が"初めから世界の構造の一部として存在している"という点です。

つまり、悪は後から生じたものではなく、世界が成立した瞬間から組み込まれているのです。

しかし、聖書は、創造の出発点において善のみが存在していたと語っています。

**神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。
(創世記1章31節)**

この聖句は、創造の本質が善であり、悪が本来の構造に含まれていなかったことを示しています。

多神教が「善と悪の初期共存」を前提とするのに対して、聖書は「本来は善のみ」であったことを強調しており、ここに両者の世界観の出発点の違いがはっきり現れています。

2. 初期共存がもたらす前提—悪は根絶できない

この世界観に立つならば、悪を完全に排除するという発想は成り立ちません。

なぜなら、悪は世界の外部から侵入したものではなく、宇宙の秩序そのものに含まれていると考えられているからです。そのため、多神教では次のような理解が前提になります。

- 悪は根絶されない
- 悪は永遠に循環し続ける
- 善と悪のバランスが維持されることが最重要となる

特にヒンドゥー思想に見られる「サンサラ（輪廻）」や「宇宙周期」の概念は、善と悪の対立が完全に終わることはなく、悪が根絶されないまま循環し続けるという世界観を端的に表しています。

世界は創造と破壊を繰り返す、その過程の中で善と悪が常に共存し、悪が消滅することはありません。

この前提が、多神教の倫理観や社会観に大きな影響を与えています。

3. 価値観の中心がバランス調整になる理由

善と悪が初めから共存していると考えられる場合、最も重要な課題は、悪の克服ではなく、両者の均衡を保つことになります。

多神教において頻繁に語られる「調和」「バランス」「中庸」は、この構造から生まれた中心的価値です。その結果、多神教社会では次の傾向が見られます。

- 破壊的な力も必要な要素として容認される
- 悪を排除するのではなく、抑制・共存する発想になる
- 問題が起きた場合、根本解決よりも調整が優先される

たとえば、古代ギリシャの都市国家における神々の信仰は、多くの場合、特定の神の怒りを鎮めることで秩序を維持しようとしていました。

バビロニアでも、破壊の女神を鎮める儀式が重要視されました。

ヒンドゥーにおいても、破壊神シヴァの役割は宇宙を維持するための循環の一部とされ、否定されるものではありません。

このような価値観は、平和で安定した社会においては一定の効果を発揮しますが、世界観の構造上、避けることのできない限界を抱えています。

4. 歴史観の傾向—調整と保全への傾斜

多神教に基づく社会では、歴史は問題の根本解決ではなく、調整と保全を中心に展開します。

そして、世界は循環するものと理解されているため、最終的な完成や解決を想定しません。このような歴史観には、次のような特徴があります。

- 同じ問題が形を変えて繰り返される

- 現状維持が優先される
- 秩序復元が中心であり、改革への動機が弱い

これは宗教だけでなく政治思想にも影響を与えます。

たとえば、バビロニア王権は「宇宙秩序の回復」を王の使命とし、破壊された秩序を元に戻すことが統治理念でした。社会を根本的に変革するという発想は希薄だったのです。

5. 乱世で機能不全に陥る理由

調和とバランスを最優先する多神教の世界観は、安定期においては社会を維持する力となります。

しかし、戦乱や大規模な社会崩壊といった危機に直面すると、重大な弱点が現れます。

なぜなら、悪を根絶する発想がなく、悪の拡大を容認しやすい傾向があり、問題解決よりも妥協と調整を優先する構造的特徴があるからです。

悪が明確な形で増大した場合でも、多神教的価値観では「バランスが崩れた」と理解され、再び均衡を取り戻すことが目的になります。

しかし、それでは破壊的勢力が抑えきれない場合があり、結果的に問題が深刻化してしまいます。

そのため、危機が長期化し、同じ混乱が繰り返される傾向があるのです。

これに対して、聖書は、歴史の終末において、悪と苦しみが最終的に取り除かれることを明確に語ります。

もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである。（ヨハネの黙示録 21 章 4 節）

この聖句が示しているのは、苦しみや悪が永遠に続くのではなく、神の計画の完成において完全に終わりを迎えるという希望です。

多神教のように、同じ混乱が永遠に循環する歴史観とは異なり、聖書は終局的な解決と完成に向かう時間軸を提示しているのです。

6. まとめ

多神教における善と悪の原初構造は、

- 悪が初めから存在する
- 悪は根絶できない
- 善と悪のバランスが最重要となる
- 歴史は調整と保全を中心に展開する
- 根本解決が困難

という特徴を持っています。

これらの前提は、多神教がもたらす寛容性や調和の価値とともに、重大な限界も内包しています。

一方で、聖書は、本来の創造が「良し」とされた完全な善であり、悪は後から生じた異常であると語り、さらに終末において悪と苦しみが終わりを迎える希望を提示します。

この対比が、次回以降の「聖書的世界観との違い」の考察へとつながっていきます。

第3回 聖書は悪の起源をどのように説明しているのか

1. 聖書の出発点—「悪は本来なかった」という世界観

聖書の世界観を理解するうえで最も重要な前提は、創造の時点において、悪は存在しなかったという点です。

創世記は、神が天地万物を創造されたあと、「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」（創世記 1 章 31 節）と記しています。

この記述は、単なる創世物語の描写ではなく、聖書全体の思想を方向づける根本宣言といえます。

すなわち、神が創造した世界は本来善であり、悪は根源的な要素ではなく、創造の目的に含まれていなかったという理解です。

この前提を踏まえるなら、聖書は「善の創造」から世界を出発させ、悪は本質的・構造的に世界に組み込まれたものではないことが明確になります。

この点は、多神教において、善と悪が初めから共存すると考える構造とは、決定的に異なっています。

多神教では、悪は宇宙の原理の一部として永続的に存在するため、善と悪のバランス調整が中心的課題になります。

しかし聖書では、悪は本質ではないため、根絶が可能であり、最終的に善のみが残るといふ希望が語られています。

2. 悪の発生は人間の墮落から始まる

では、聖書は悪の起源をどこに求めているのでしょうか。聖書は、悪が創造の初期状態から存在していたとは語りません。

悪は神によって創造されたものではなく、被造物の自由意思が正しい目的から逸脱した結果として生じたと説明します。この逸脱が、一般に「墮落」と呼ばれる出来事です。

創世記の 3 章に描かれる人間の墮落は、象徴的な物語として理解される場合がありますが、聖書が伝えようとする核心は明確です。

人間は本来、神との正しい関係において生きるように創造されていました。

しかし、人間が自由意思を誤って用いたことにより、神との関係が断絶し、その結果として悪が世界に入り込んだとされています。

ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。（ローマ人への手紙 5 章 12 節）

この聖句が示すように、悪は本質的な実体ではなく、神との断絶によって生じた異常な状態、すなわち目的からの逸脱として理解されます。

宇宙の構造に組み込まれた必然ではなく後発的に生じたものである以上、悪は永遠に存在し続ける必要がなく、将来的に取り除かれる余地があることとなります。

この点が、善と悪が初めから共存するとする多神教の世界観と根本的に異なるのです。

3. 悪は根絶可能であるという聖書の主張

聖書の世界観において極めて重要なのは、悪が本質ではなく出来事である以上、それは根絶可能であるという結論に至ることです。

もし悪が宇宙の根源的構造の一部であるなら、いかなる努力によっても悪は消滅し得ません。

しかし、聖書は、悪を本来の創造目的からの逸脱として位置づけているため、創造者である神がその逸脱を正し、世界を本来の姿に回復させることが可能であると主張します。

この理解は、単なる楽観的な希望ではなく、聖書全体を貫く一貫したテーマになっています。

旧約聖書では、預言者たちが、墮落によって失われた神との関係の復帰と救いを語り、新約聖書においては、イエス・キリストが、その失われた関係を復帰するための存在として語られています。

イエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ福音書 14 章 6 節）と語りました。

この言葉は、神との断絶によって生じた悪の状態を根本的に克服する道が、イエスを通じて開かれたことを示しています。

救いとは抽象的な希望ではなく、神との関係の復帰という具体的な方向性を持つものとして聖書は提示しているのです。

悪が本質ではなく異常であるからこそ、救いの可能性が生まれ、歴史は回復へと向かう方向性を持つことができます。

このような終末における希望は、聖書の歴史観が完成へと向かう歴史観であることと深く結びついています。

聖書の歴史観では、創造から始まり、墮落を経て、復帰と完成へと至る明確な流れが存在します。

したがって、悪は永続するものではなく、最終的に取り除かれ、神の創造目的が完全に実現するという確信が生まれるのです。

4. 目的論的世界観という決定的特徴

以上の理解を総合すると、聖書の世界観は目的論的であり、歴史が意味と方向性を持って進むという特徴を持ちます。

多神教は、善と悪が永遠に共存し続ける構造のため、歴史は循環し、最終的な完成を持ちません。

しかし聖書では、悪が後発的に生じた異常であるため、その除去が可能であり、世界は本来の創造目的に回復されるという終末的方向性が明確に示されています。

この目的論的世界観は、信仰者に希望と行動の動機を与えます。

悪が永遠に残る世界観では、どれほど努力しても根本的な変革は不可能であり、最終的には調和やバランスに落ち着くしかありません。

しかし、聖書の世界観においては、悪が根絶され善が完成するという確信があるため、現実の問題に立ち向かい、改善しようとする積極的な姿勢を生み出すことが可能なのです。

第4回 光と影、天国と地獄に対する多神教の誤解

1. 自然現象の比喩が善悪理解に流用された背景

多神教では、善と悪の関係を説明する際に、「光があれば影がある」という自然現象を比喩として用いることがあります。

光が物体に当たれば必ず影が生じるように、善が存在する限り、悪も必然的に存在すると理解されるのです。

この比喩は直感的で分かりやすく、多くの人々に受け入れられやすいため、善悪観の説明として頻繁に用いられてきました。

特に自然宗教的世界観では、自然界に見られる対立構造が、そのまま宇宙の原理として拡張され、光と影、昼と夜、秩序と混沌といった対立要素が普遍的なものとして理解されます。

しかし、この自然現象を善悪に適用する発想には、重大な問題があります。

光と影の関係は、物質と光源の配置によって生じる物理的現象であり、自然界における観察としては成立しますが、それをそのまま倫理的・霊的領域に適用することには、本質的な飛躍が存在しているのです。

2. 光と影は"同一空間で生じる現象"という決定的な違い

光と影が示しているのは、あくまで物理空間における現象であって、存在の目的や価値に関わるものではありません。

影は光が遮られることによって生じる相対的な状態であり、光が当たっている領域と影が生じている領域は、同一の物理空間の中に同時に存在することができます。

つまり、光と影は、同じ物理領域の中で同時に共存できる現象です。

この性質が、多神教において「善と悪も同じように共存し、互いに依存する」という理解に拡張されてしまった大きな要因です。

聖書は、光と闇の関係を、互いに依存し合う二つの原理としてではなく、一方が他方に打ち勝つ関係として描きます。

光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。（ヨハネによる福音書1章5節）

ここで示されているのは、光と闇が均衡を保ちながら共存する構造ではなく、光が最終的に闇に打ち勝つという方向性です。

この理解は、「光があれば影がある」といった多神教的二元論とは根本的に異なっています。

この光と影の比喻は、天国と地獄の理解に対しては全く適用できません。なぜなら、天国と地獄は、光と影のように同じ空間に共存できないからです。

光と影の関係をそのまま霊的領域に当てはめてしまうことは、カテゴリーの混同を引き起こし、天国と地獄という概念の本質を見失わせることとなります。

3. 天国（善）と地獄（悪）は目的と方向性が根本的に対立している

聖書的世界観において最も重要な点は、天国と地獄が単なる場所として存在するのではなく、それぞれが明確な目的性と方向性を持っているということです。

天国は神が創造された本来の目的が完全に実現された世界であり、神との正しい関係が回復され、愛と平和が支配する状態です。

これは、創世記における「非常に良かった」とされた創造の完成形（善）として理解されます。

一方で、地獄とは、神の目的から完全に分離し、神との関係が断絶した状態（悪）を指します。

地獄は単に苦痛が存在する場所というよりも、神が意図された創造目的がまったく実現していない状態であり、愛や善が成立しない領域として描かれます。

この理解に立つならば、天国と地獄は方向性が正反対であり、同じ存在領域に共存することは不可能です。

光と影のように相互依存しているわけではなく、むしろ相容れない目的を持つ完全に異質な状態なのです。

4. 聖書的観点から見た天国と地獄の本質

聖書は天国を、神の目的に一致した世界として描きます。神の意志が完全に行われ、創造の本来の姿が実現し、神と人間が調和して生きる場所であると理解されるのです。

この状態について、ヨハネの黙示録の21章4節では「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない」と記されています。

つまり、天国は神の愛と善が完全に実現する、最終的な完成の世界です。

これに対して地獄は、神の目的から分離した状態として示されます。神との関係が断たれた結果、創造目的が実現されていない存在状態です。

したがって地獄は、単に罰が与えられる場所というよりも、神の意志と目的から逸脱した結果として生じた存在状態そのものを意味します。

それは、本来進むべき創造の方向性から外れた状態が固定化された姿であると言えるでしょう。

この理解は、聖書の描写とも一致しています。イエスは、「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく」（マタイによる福音

書 7 章 21 節) と語り、神の意志に従うことの有無が、天国と地獄という本質的な在り方の分岐点であることを示しています。

このような理解を踏まえたうえで、聖書は、終末において、人間が最終的に二つの在り方に分かれることを象徴的に描いています。

羊を右に、やぎを左におくであらう。(マタイによる福音書 25 章 33 節)

この描写は、天国と地獄が同じ領域に混在するのではなく、神の裁きにおいてははっきりと区別されることを示しています。

すなわち、天国と地獄は、一つの空間における光と影のように共存するのではなく、目的と方向の違いによって分離された状態と理解されるべきなのです。

このように、天国と地獄は単なる対立概念ではなく、目的論的観点から、完全に異なる次元に属しているため、同じ空間で共存することはできません。

5. 光と影の比喩が天国と地獄に適用できない理由

以上の理解を踏まえるならば、「光があれば影がある」という比喩を天国と地獄の関係に適用することは、根本的に誤りであることが分かります。

光と影は同一空間における現象であり、物理法則によって説明できる相対的な状態です。

しかし、天国と地獄は存在目的が対立しており、それぞれが異なる霊的次元に属する状態です。

両者は同じ空間に共存することが不可能であり、光と影の関係とは本質的に異なります。

多神教的二元論が陥りやすい誤解は、世界を自然現象の延長として理解し、霊的領域にまでその枠組みを適用してしまう点にあります。

その結果、天国と地獄が永遠に共存するという理解が生まれ、悪は根絶されないものだという前提が形成されてしまうのです。

天国と地獄の本質を正しく理解するためには、光と影の物理現象を越えて、目的と方向性に基づく霊的現実としてとらえる視点が必要です。

第5回 なぜ多神教は"根本的な救い"を語れないのか

1. 多神教における価値軸の中心―「バランス維持」

多神教の世界観を貫く根本的価値は、善と悪、秩序と混沌といった相反する要素の「バランスを保つこと」です。

多くの神々が存在し、それぞれが異なる性格や役割を持つと理解される世界では、最も重要な倫理的課題は、対立する力の均衡を維持し、全体の調和を保つこととなります。

破壊を司る神や混沌の象徴とされる存在も、世界全体の循環や安定のために必要とされ、排除されるべきものではなく、役割を持つ存在として認識されます。

このような考え方は、日常生活における倫理や社会秩序を維持するうえでは一定の機能を果たします。

対立が生じたときに、極端な排除ではなく、妥協や調整を図る姿勢は、社会の安定に寄与する機会が多く、平時においては有効な道德体系となり得ます。

そのため、多神教的価値観は、「寛容」や「共存」と結びついて評価されることが少なくありません。

2. 調和主義が抱える決定的限界―危機への対応力の欠如

しかし、この調和主義的倫理には重大な弱点があります。それは、乱世や危機、そして悪が著しく増大する状況において、問題を根本的に解決する方向へ踏み切ることができないという点です。

多神教的価値観では、悪を完全に排除するという発想が、そもそも成立しません。なぜなら、悪は宇宙の構造の一部であり、世界の均衡に必要な要素だと理解されているからです。

そのため、社会に深刻な悪が蔓延した場合でも、多神教的発想では「均衡が崩れた」と捉え、再び調和を取り戻すことが目的となります。

しかし、悪が意図的に拡大し、破壊的勢力が優勢となっている状況では、単に均衡を回復しようとするだけでは根本問題が解決されず、むしろ状況を悪化させる危険性があります。

妥協と調整を重視する姿勢は、危機において決断と改革を妨げ、同じ問題が繰り返される原因となります。この点に対して、聖書は全く異なる姿勢を提示します。

悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。（ローマ人への手紙 12章 21節）

聖書的世界観では、悪を前提とした均衡ではなく、悪に対する積極的克服が求

められます。

この一節は、調整や妥協ではなく、善によって悪を打ち破るという方向性を示しており、多神教的調和主義とは根本的に異なる価値観を提示しています。

3. なぜ多神教は「救い」を語れないのか

多神教の世界観においては、善と悪が初めから共存する構造であるため、悪が永遠に存在することが前提となります。

この前提がある限り、「救い」という概念は根本的解決ではなく、均衡の回復や一時的安定にとどまらざるを得ません。

多神教における救いとは、悪が消滅して善が完全に実現する状態ではなく、あくまで悪と善の力関係が調整され、平衡が保たれた状態に過ぎないのです。

そのため、多神教では永続的な希望や最終的な完成形を提示することができません。この構造が、多神教が根源的な救いを語れない決定的要因です。

調和が維持されている限り、表面的には安定が保たれますが、その背後には、「悪は永遠に続く」という、諦めに近い前提が横たわっています。

4. 聖書の提示する「救い」

これに対して、聖書は全く異なる救いの理解を提示します。聖書において救いとは、単に心の安らぎや霊的な慰めを得ることではなく、本来の創造目的への復帰を指します。

世界が神によって善として創造されたという前提に立てば、墮落によって生じた悪は本質ではなく、異常な状態であると理解されます。

この理解に基づくならば、救いとは失われた本来の状態を取り戻すことであり、悪の克服と善の完成を伴います。

聖書の歴史観は、創造から墮落、そして復帰と完成へと向かう時間軸を持っており、救いはこの流れの中で実現するものとして語られます。この目的論的構造が、多神教には存在しない決定的な特徴です。

5. 永遠性を語れるのは一神教だけが持つ前提があるため

聖書は、悪が最終的に滅びると明確に語ります。ヨハネの黙示録 21 章に描かれる新しい天と地は、悪が完全に取除かれ、神の目的が完全に実現する世界です。

この終末的希望が成立する理由は、聖書が悪を本質としてではなく、後から生じた逸脱として理解しているからです。

詩篇 37 篇は、現世において悪者が栄えているように見える現実への信仰的応答として書かれた知恵の詩篇ですが、その核心にあるのは、悪が最終的には必ず滅び、神を待ち望む者が祝福を受け継ぐという確信です。

悪を行う者は断ち滅ぼされ、主を待ち望む者は国を継ぐからである。（詩篇 37 篇 9 節）

この詩篇の宣言は、悪が永続しないという聖書的前提を明確に示すと同時に、救いが単なる均衡維持ではなく、悪の終焉と善の確立を意味することを示しています。

悪が本質ではないと規定する一神教だけが、悪の根絶可能性と永遠の善の実現を語るすることができます。

逆に言えば、悪が宇宙の構造に組み込まれている多神教の世界観では、悪が永遠に残ることが前提となるため、永遠的な救いは成立しません。ここに両者の根本的な違いがあります。

6. まとめ

多神教はバランス維持を中心価値とするため、平時においては道德体系として機能しますが、危機や悪の増大に対しては根本的解決力を欠きます。

悪が永遠に存在する前提がある限り、救いは恒久的解決ではなく調整にとどまり、永遠の希望を提示することはできません。

これに対して聖書は、救いを復帰として理解し、悪の根絶と善の完成という終末的希望を提示します。この目的論的世界観こそが、根本的救いを語るができる一神教の特徴です。

第6回 多神教と聖書の目的論の違い

1. 多神教が提示する人生の目的—調和と適応を中心とした世界観

多神教の世界観において、人生の目的はしばしば調和や均衡、そして環境への適応に置かれます。

多くの神々が存在し、それぞれ、自然界や社会のさまざまな側面を象徴していると理解される世界では、人間はその複雑な力関係の中で調整役を担い、周囲と調和して生きることが最も重要な価値だとされます。

個人の幸福や成長よりも、関係性の維持や社会の安定が優先される傾向が強く、人生とは変動する環境に適応しながらバランスを保つ営みだと理解されます。

この目的観は、自然界の循環や季節の移り変わりといった現象を基盤にしているため、歴史や生命を循環的に捉える思考と深く結びついています。

世界は永遠に生まれ変わり、破壊と創造が繰り返されると理解され、人生の究極的目標は、根本的な解決ではなく、循環の中で安定した状態を維持することになるのです。

問題が生じたとしても、最終的には再び均衡が取れることが期待され、根底には「すべては巡り戻る」という前提が存在します。

2. 循環と維持を中心とする目的観がもたらす影響

このような目的観は、平穏な社会においては一定の効果を発揮します。環境に適応し、極端な変化を避け、安定を保つ姿勢は、共同体の維持にとって有益です。

しかし、循環と維持を目的とする価値観には、根本的な問題があります。それは、深刻な社会危機や倫理的墮落、大きな悪の増大に対して決定的な対応力を持たないという点です。

多神教的世界観では、悪は永遠に存在する前提となっているため、悪の根絶は想定されません。

その結果、人間の人生の目的は変革ではなく適応となり、現状を大きく変えることよりも、流れに身を任せながら均衡を取り戻すことが優先されます。

この構造のもとでは、人生とは「与えられた条件の中で調和を保つこと」であり、「生きる意味を根本的に問い直すこと」にはあまり重点が置かれません。

3. 聖書が提示する人生の目的—創造目的の実現

これに対して、聖書は、人生の目的をまったく異なる観点から提示します。

聖書における人生の目的は、創造目的の実現にあります。創世記に描かれるように、人間は神のかたちに造られ、神との愛の関係に生き、互いに愛し合い、成熟し、祝福を分かち合う存在として創造されました。

創造の場面において、神は人間に向かって「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」（創世記 1 章 28 節）と語られました。

この言葉は、単なる人口増加の命令ではなく、愛と関係性の拡大、祝福の拡張という、創造目的の核心を示す宣言と理解することができます。

もちろん、この言葉を文字通り「繁殖の命令」と読む解釈も存在しますが、「統一原理」は、創世記の文脈全体と合わせて、この命令を愛に基づく関係および共同体の拡大という創造の本旨を示すものと理解します。

すなわち「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」とは、愛の実体的拡張としての家庭完成と、その祝福が地上全体へと広がっていくことを示す創造目的の宣言として捉えることができるのです。

この目的が聖書における人間理解の中心にあり、人生はその創造目的を実現するプロセスとして位置づけられます。

この理解に立つならば、人生とは、単に環境に適応することではなく、人格的成長や関係性の成熟、愛に基づく共同体形成といった積極的な発展が求められるものとなります。

聖書の目的論は、循環ではなく進展と完成を前提としています。そのため、人生は意味と方向性を持った歩みであり、創造目的に近づくことが人生の核心となります。

4. 墮落以前の状態への復帰という時間軸

聖書の世界観が多神教と決定的に異なるのは、墮落以前の状態への復帰という時間軸を持っている点です。

聖書は、人間と世界が本来善なる創造状態にあったと理解し、墮落によってその状態が失われたと説明します。

したがって、救いとは、単なる精神的安堵ではなく、本来の創造目的への復帰を意味します。

この復帰のプロセスは、個人の内面的成長だけでなく、歴史全体の方向性とも結びついています。

創造から墮落、そして復帰と完成に至る時間的流れが存在するため、人生は循環ではなく前進し、完成に向かう過程として理解されるのです。

この視点に立つならば、人生の目的は環境への適応ではなく、創造目的の実現と墮落状態の克服にあります。

5. 終末的展望—悪が消滅する未来があるという希望

聖書の目的論を特徴づけるもう一つの重要な要素は、最終的に悪が消滅するという終末的展望が存在することです。

聖書は、悪が永遠に存続するものではなく、最終的には取り除かれ、神の目的が完全に実現する世界が訪れると語ります。

この終末的希望があるからこそ、聖書における人生の目的は、単なる維持や適応ではなく、悪を克服し、善の完成に向けて生きる積極的な方向性を持つことができます。イエスはその使命を次のように宣言しています。

人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである。（ルカ福音書 19 章 10 節）

この言葉は、救いが単なる均衡回復ではなく、本来の創造状態への復帰と目的の実現を伴うものであることを示しています。

悪が永遠に続くとする多神教的世界観では、このような究極的希望は成立しません。目的論の違いが人生に対する姿勢に直接的な影響を与えるのです。

6. 人生観・倫理観・家族観・社会思想への影響

この目的論の違いは、単なる宗教的理解にとどまらず、人生観、倫理観、家族観、さらには社会思想にまで深く影響を与えます。

多神教的目的観では、調和と維持が中心となるため、社会は現状維持を重視し、個人の成長や改革よりも共同体の安定が優先されます。

家族観においても、伝統や役割分担が強調され、変化より継続が価値とされる場合が多く見られます。

これに対して聖書の目的観では、個人が成熟し、愛に基づく関係が形成されることが重視されます。

家族は単なる共同体の単位ではなく、愛と信頼に基づく関係が育まれる場として理解されます。

社会思想においても、悪の克服と善の実現という方向性が存在するため、改革や改善への積極的姿勢が生まれる土壌となります。

7. まとめ

多神教は人生の目的を調和や適応に置き、循環と維持を中心とする世界観を提示しますが、それは根本的な変革や完成を前提としない目的論です。

一方、聖書は創造目的の実現と墮落以前の状態への復帰を人生の中心に据え、最終的に悪が消滅するという終末的展望を持っています。

この目的論の違いは、人生観や社会観に大きな影響を与え、人間がどのように

生き、何を指すのかという根本的な問いに対して異なる回答を提示します。この点に、両者の世界観の決定的な差があるのです。

第7回 多神教は本当に寛容なのか？

1. 多神教に対する一般的イメージとその背景

現代の日本社会において、多神教は「何でも受け入れる寛容な宗教」といった肯定的イメージで語られることが多くあります。

神道や古代ギリシャ・ローマの宗教、ヒンドゥー教など、複数の神々を認める宗教は、他者の信仰を排除しない柔軟な態度を持っていると、理解される傾向があるのです。

「どの神も認めれば争いは起こらない」「多神教は平和的で、一神教は排他的」という主張は、メディアや一般的な議論でも頻繁に見られます。

こうしたイメージは、多神教が複数の神々を受け入れるという構造から生まれています。

神々の役割や性格が多様であるため、他者の信仰対象を否定せずに共存できるという理解が生まれやすいのです。

しかし、このイメージがそのまま歴史的事実を反映しているかというと、必ずしもそうではありません。

むしろ、実際の歴史における多神教社会は、排他や征服、宗教的対立を多く経験してきました。

この点を明確にしなければ、「多神教＝寛容」という評価は表面的なものにとどまってしまいます。

2. 歴史が示す現実—多神教社会にも排他的行為や戦争が存在した

実際の歴史を見れば、多神教が必ずしも寛容ではなかったことが明らかになります。

古代ギリシャでは、都市国家ごとに守護神が異なり、他都市の神々を侮辱したり、宗教的儀式を拒否したりすることが紛争の原因となりました。

その典型的な例として、哲学者ソクラテスが「国家が認める神々を認めない」という不敬神の罪で死刑判決を受けた事件が挙げられます（前 399 年）。

これは、多神教社会においても、体制が認める宗教秩序に従わない者が排除の対象となったことを示す、歴史上最も著名な実例の一つです。

宗教祭祀の違反は政治的反逆とみなされ、厳しい処罰が課されることもありました。

ローマ帝国においても、国家祭儀への参加が義務化され、それを拒否する者は国家秩序を乱す存在として迫害されました。

キリスト教徒が迫害された背景には、一神教の排他性ではなく、ローマ帝国が

国家秩序を維持するために、すべての人々に共通の宗教的忠誠を求めた統治体制があったのです。

このローマ帝国の史実は、多神教社会においても、一神教が体制に適合しない場合には、排斥の対象になり得たことを示す具体的な実例です。

また、バビロニアやアッシリアの歴史においても、征服した民族の神々を否定したり、自国の神を強制したりする例が多数存在しました。

ヒンドゥー社会においても、異なる宗派間の対立やカースト制度と結びついた排除構造が見られます。

このように、多神教の社会が自動的に寛容で平和的であったという理解は、歴史的事実によって否定されます。

3. 「多神教は寛容」という議論に潜む誤解

多神教が寛容だとされる理由の一つに、「他者の神を否定しない」という理解があるわけですが、この理解には重大な誤解が含まれています。

多神教が他者の神を受け入れる場合、その受け入れ方には条件が伴うことが多いのです。

つまり、自分たちの神々の体系に組み込むことが可能な場合に限って、他者の神を受け入れるという構造が存在するのです。

たとえばローマ帝国では、征服した地域の神々をローマの神々の一部として取り込み、国家祭儀の枠内に組み込むことで統治を行いました。

しかし、もし他者の信仰がローマの宗教制度に従わない場合、寛容は一転して排除へと変わりました。

多神教の寛容性は、あくまで自らの宗教的枠組みを維持する前提の上に成り立っていたのです。

この構造を理解しなければ、「多神教は何でも受け入れる」という評価は表面的な理解に過ぎません。

4. 聖書の隣人愛との根本的な違い

これに対して、聖書が提示する寛容の理解は全く別の基盤に立っています。

聖書は、他者を受け入れる際に「同じ神を信じることを条件とはしません。

むしろ、信仰の違いに関わらず、他者を愛し尊重することを求めます。

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイによる福音書 22 章 39 節）という教えは、相手がどのような信仰や背景を持っていようとも尊重する姿勢を示しています。

聖書的な隣人愛の中心にあるのは、相手を神に創造された尊厳ある存在として認めるという理解です。

これは宗教的統合や支配を目的とした寛容ではなく、関係性に基づく愛の実践です。さらに、聖書は愛の本質について次のように語ります。

愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。（コリント人への第一の手紙 13 章 5 節）

この一節は、聖書的な寛容が利害調整や支配構造に基づくものではなく、自己利益を追求しない無償の愛に基づいていることを示しています。

この点で、聖書的な寛容は、多神教に見られる「取り込む寛容」ではなく、相手の存在そのものを尊重するという本質的な違いがあります。

5. 多神教が持つ寛容性の限界

多神教が寛容に見える背景には、他者の神々を体系に組み込むことで統治や社会秩序を維持するという政治的目的が存在する場合があります。

そのため、このような寛容性は、状況次第で容易に排他性へと変化します。

自らの宗教体系を脅かす存在や従わない信仰に対しては、寛容ではなく、迫害が行われることも少なくありませんでした。

この構造は、多神教が持つ寛容性が本質的なものではなく、条件付きであることを示しています。

多神教においては、最終的な価値が調和や秩序維持に置かれるため、それを脅かす存在には排除が正当化されやすいのです。

この点において、多神教の寛容性には明確な限界が存在します。

6. まとめ

多神教が寛容であるというイメージは、表面的には理解しやすいものですが、歴史的事実や宗教構造を分析すると、その寛容性は条件付きであり、状況によって排他へと転じることが明らかになります。

これに対して、聖書が提示する寛容は、隣人愛に基づく本質的な尊重であり、相手を取り込むことを前提としない根本的な違いがあります。

聖書的な寛容は、自らの利益や支配のためではなく、相手を尊重し愛する姿勢に基づくものであり、その基盤こそが多神教的な寛容との決定的な相違点なのです。

第8回 創世記3章の墮落物語は善悪二元論ではない

1. なぜ創世記の3章は誤解されてきたのか

創世記の3章に記された墮落の物語は、多くの人にとって「善と悪の戦いが始まった場面」「宇宙に悪が誕生した瞬間」と理解されています。

そのため、創世記の3章が善悪二元論の起点であるかのようなイメージが強く定着してきました。

しかし、この理解は聖書全体の構造や創世記の文脈から見たとき、決定的に誤っています。

創世記の3章は、善と悪という二つの永遠の原理が誕生した物語ではなく、本来は善しか存在していなかった世界が逸脱した出来事として描かれているのです。

2. 本来の創造には悪は存在しなかった

創世記の1章から2章において、聖書は創造の善性を繰り返し強調しています。

そこには最初から善と悪が共存していたという考え方は見られません。聖書は創造の完成について次のように語っています。

神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。
(創世記1章31節)

この聖句が示すように、創造の本来の状態は完全な善であり、悪は創造構造の一部として存在していたのではなく、後から生じた異常な状態として理解されません。

つまり、多神教的世界観に見られる、「最初から善と悪が共存していた」という前提とはまったく異なり、聖書は、創造の時点で善のみが存在していたと語っているのです。

3. 「善悪を知る木」の誤解—善と悪の知識ではない

多くの人々が、善悪を知る木を「善と悪についての知識そのもの」と理解してしまいます。

しかし、ヘブライ語原文を見ると、「善悪を知る」とは単に善と悪についての知識を得ることではありません。

ここで用いられている「知る(yada)」は、単なる知的理解ではなく、直接的な経験や主体的な関与を含意するヘブライ語です。

たとえば創世記において、男女が「知り合う」という意味でも用いられる言葉

であり、表面的な情報取得ではなく、深い関与と支配を意味します。

したがって「善悪を知る」とは、善悪の判断基準そのものを自らが握り、神の権威から独立しようとする姿勢を指すと解釈することができます。

創世記の3章は、悪という独立した原理が誕生した場面ではなく、人間が神の基準から離れ、自律しようとした出来事を描いているのです。

4. 墮落とは「悪という別原理の誕生」ではない

創世記の3章で描かれているのは、善と悪が並び立つ二元世界の成立ではありません。聖書は墮落の結果について次のように語ります。

ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。(ローマ人への手紙 5章 12節)

ここで描かれているのは、神との関係から切り離された結果として生じた欠如状態であり、悪が神と同等の存在として誕生したことではありません。

聖書の理解では、悪は本質的な実体ではなく、善の欠如や歪みとして扱われます。

つまり、悪とは独立した存在ではなく、神との断絶によって生じた異常な状態にすぎないのです。

5. 光と影の関係が示す決定的な違い

この点を視覚的に理解するために、「光と影」の関係を考えることができます。

影とは、実体として独立して存在するものではありません。影は"光が存在していない状態"であり、光を離れて単独で存在することはできません。

影が生じるためには、必ず光の存在が前提にあり、影そのものに固有の力や本質があるわけではないのです。

「光があるから影がある」と聞くと、多神教や善悪二元論では、そのまま光を善、影を悪に対応させてしまいがちですが、これは決定的に誤った理解です。

影は光の欠如によって生じる派生的現象にすぎず、独立して存在する実体ではありません。

ところが善悪二元論は、悪が光（善）から離れても単独の原理として存在し得るものとしています。

もし悪が独立して存在できるなら、善と悪は永遠に対立し続け、決して解消されず、根絶は不可能です。

しかし創世記の3章は、悪を実体としてではなく、本来の善から逸脱した状態として描いており、独立原理ではないことを示しているのです。

この理解こそ、聖書が善悪二元論とは異なる方向性を持つ決定的な根拠となります。

6. なぜこのような理解が重要なのか

もし創世記の3章を「善と悪という二つの永遠の原理の対立」と理解してしまうと、結論は多神教と同じになります。

すなわち、悪は永遠に存在し続け、根絶できず、世界は調和や均衡によって維持するしかないという世界観です。

しかし聖書はまったく異なる結論を提示します。聖書は終末について次のように語っています。

もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである。(ヨハネの黙示録 21 章 4 節)

悪が善の欠如状態であるなら、その克服は「悪を抑え込むこと」ではなく、欠けていた神との関係が復帰されることによって実現します。

太陽が天頂に達し、その光が真っ直ぐに照らされるとき、物体の影が消えるように、神と人との関係が完全に復帰され、神の愛を完全に受けることができる状態になったとき、悪はその存在根拠を失うのです。

この復帰とは、人間が神と垂直に結ばれ、神の意志と愛を全面的に受け取る状態、すなわち創造本来の関係性への復帰を意味します。

7. 結論：創世記 3 章は希望の前提である

創世記の3章は、善と悪という二つの原理が誕生した物語ではなく、神によって完全な善として創造された世界が、人間の選択によって逸脱した出来事を描いています。

したがって、創世記の3章は悪の起源神話ではなく、悪の終焉が可能であることを示しているのです。

悪が本質ではなく欠如であるからこそ、悪は根絶可能であり、最終的に善のみが残り、完全な救いが語られるという聖書の目的論的希望が成立します。

この理解は、本シリーズ全体を貫く核心であり、創世記の3章を正しく理解するうえで欠かせない視点です。

結 多神教批判ではなく"世界観の本質"を比較する

1. 本シリーズの視点—批判ではなく理解と比較

本シリーズ全体を通して強調してきたことは、多神教を単純に批判することが目的ではないという点です。

多神教には、調和や共存といった価値が存在し、平時の社会において一定の安定をもたらしてきた側面があります。

また、自然界の循環や多様な価値観を受け入れる柔軟性が、多神教的世界観に根付いていることも事実です。

したがって、多神教を表面的に否定することは、本質的議論にはつながりません。

重要なのは、それぞれの世界観がどのように善と悪を理解し、その理解が、人間の生き方や社会のあり方にどのような結果をもたらすのかを分析することです。

世界観は単なる思想的装飾ではなく、人生観、倫理観、政治思想、家族観、教育、社会構造に深く影響を及ぼします。

どのような前提を持つかによって、人間が何を目指し、どのように生きるのが根本から変わるのです。

2. 世界観が生み出す人間の生き方の結果を分析する

多神教的世界観では、善と悪が初めから共存しているという前提が存在します。

そのため、人生や社会の目的は、対立する力のバランスを整え、均衡を維持することに置かれます。

この世界観は、環境に適応しながら調和を保つ生き方を促し、変化よりも維持を重視する傾向を生み出します。

問題が発生しても、それは循環の一部として理解され、根本的解決ではなく、調整によって対応することが多くなります。

そして、この構造のもとでは、悪が永遠に存在することが前提となっているため、救いは恒久的解決を意味しません。

人生の目的は最終的完成ではなく、循環の中で役割を果たすことにとどまり、希望のあり方も限定的なものになります。

表面的には安定しているように見えても、その背後には「悪はなくなる」という諦念（あきらめの思い）が存在し、人生の深い意味や究極的目的を提示しにくいという限界が生じます。

3. 聖書の創造原理がもたらす決定的特徴

これに対して聖書は、創造の時点において悪は本来存在しなかったと宣言します。

**神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。
(創世記 1 章 31 節)**

この聖句は、聖書の世界観における根本前提です。悪は神によって創造された構造的要素ではなく、後から生じた異常な状態、すなわち墮落という出来事の結果として理解されます。

この前提が決定的に重要なのは、聖書が悪を本質ではなく逸脱として規定することによって、悪の根絶可能性が開かれるからです。

悪が世界の構造そのものに組み込まれていない以上、創造本来の状態への復帰が可能となり、歴史は循環ではなく、目的をもった復帰と完成へと向かう流れとして理解されます。

4. 聖書が語る三つの核心——根本的解決・完全な救い・悪の終焉

聖書は、創造原理に基づき、他の宗教では語ることのできない三つの核心を提示します。

第一に、根本的解決を語ることができます。悪が後発的に生じた逸脱であるならば、その原因を正し、創造本来の状態を復帰することが可能となります。

第二に、完全な救いを提示できます。救いとは単なる精神的慰めや均衡の復帰ではなく、神との関係の完全な復帰、創造目的の実現を含むものであり、完成を目指す方向性を持ちます。

第三に、悪の終焉を語るすることができます。「先のが、すでに過ぎ去った」(黙示録 21 章 4 節)と示されるように、終末において悪が完全に滅び、新しい創造が実現する未来が明確に描かれます。

このような終末における希望は、一神教の核心であり、信仰者の人生に意味と方向性を与える根本的支柱となっています。

5. 一神教が内包する重大な課題—基準が神から人間へ移るとき

しかし同時に、ここで一つの重要な注意点を指摘しておく必要があります。

一神教は、善と悪の判断基準を神に置くことによって初めて、その秩序と希望を保ちます。

ところが、この基準が神ではなく人間に移されたとき、一神教は本来の姿を失い、むしろ多神教以上に混沌と争いを生み出す危険性を内包することになります。

善悪の判断を人間自身が握った瞬間、「唯一の正義」を自称する人間や集団が

生まれ、自らを絶対化し、異なる立場を持つ他者を悪と断じる構造が生じます。

このとき一神教は、神中心の倫理ではなく、人間中心の権力装置へと変質してしまいます。

これこそまさに創世記の3章が描く墮落の状態であり、人間が神に代わって善悪の基準を握ろうとした結果です。

歴史において、一神教が暴力や排他性と結びついた事例が存在するのは、神の名を用いながら、実際には、神ではなく、人間が善悪の基準となってしまうからにほかなりません。

たとえば、中世ヨーロッパにおける十字軍や宗教裁判は、しばしばキリスト教の権威を名目として行われましたが、その実態は政治権力と結びついた人間の支配欲や集団の利益追求でした。

これらは聖書的世界観の帰結ではなく、人間が神の権威を篡奪した結果として生じた逸脱です。このような逸脱の構造を正しく認識することは、誠実な聖書理解において不可欠な視点です。

6. 結論—世界観が人生を決定する

本シリーズを通して明らかになったのは、善と悪の理解に関する前提だけでなく、その判断基準をどこに置くかが、人生の目的、社会の構造、希望のあり方に決定的影響を与えるという事実です。

多神教的世界観は、調和や共存という価値を持ちながらも、悪の永続性を前提とするため、根本的救いを提示することができません。

一方、聖書は創造原理に基づき、根本的解決、完全な救い、そして悪の終焉という究極的希望を語ります。ただし、それは、善悪の基準を神に置き続けるという前提のもとにおいてのみ成立します。

したがって、本シリーズの焦点は多神教批判ではなく、世界観の本質がどのような結果を生み出すかという比較にあります。

私たちがどの世界観を採用するか、そしてその基準をどこに置くかによって、人生の意味や社会の方向性は大きく変わります。

その前提を深く理解し、意識して選び取ることが最も重要な課題なのです。

補 「統一原理」が示す「善と悪に対する第三の視点」

本シリーズでは、多神教と聖書的一神教の世界観を比較しながら、「善と悪をどのように理解するか」という前提が、人生観・歴史観・救済観に決定的な違いをもたらすことを見てきました。

ここでは、その議論をさらに一段深めるために、「統一原理」（『原理講論』）が提示する独特な善悪観を補足的に取り上げたいと思います。

この善悪観は、一神教の「悪は最終的に根絶される」という主張とも、多神教の「悪は世界の一部として存在し続ける」という理解とも同一ではありません。

むしろその両者を、より高い次元で統合する視点を提供しています。

1. 「統一原理」の善悪観

「統一原理」（『原理講論』）は、善と悪を次のように定義します。

善と悪とは、同一の意味をもつものが、相反した目的を指向して現れたその結果を指している言葉なのである。（『原理講論』 p118）

ここで重要なのは、善と悪が「本質的に異なる二つの存在」ではないという点です。

人間の性稟（性質・欲望・能力）そのものは、本来「創造本性」であり、それ自体が善でも悪でもありません。

決定的なのは、その性稟がどの目的を指向して現れるかという点です。

神のみこころ、すなわち創造目的を指向して現れれば「善」となり、サタンの目的、すなわち自己中心的な方向を指向して現れれば「悪」となるのです。

このように、「統一原理」が主張する善悪の区別は、存在の違いではなく方向性の違いによって決定されます。

2. 「統一原理」の善悪観が示す堕落の本質

このような善悪に対する理解は、堕落を悪なる性質が新たに創造された出来事ではなく、本来は神の創造目的に従って生きるように造られていた人間が、その生き方の中心を神から自分自身へと移してしまった出来事として捉え直します。

すなわち、堕落とは、欲望が生じたことでもなく、能力が与えられたことでもなく、目的の中心が神から自己へと移行した状態です。

これは、創世記の3章における「善悪を知る」という表現とも深く対応しています。

神を中心とするのではなく、自分自身が善悪判断の主体になろうとしたこと、それが人間の堕落であるという理解です。

3. 「悪は根絶される」とは存在の消滅ではなく方向の転換である

ここで、『原理講論』の善悪観は、一神教的な「悪の終焉」と多神教的な「悪の存続」という二つの主張を、そのまま対立させるのではなく、次元を変えて再定義します。

悪なる存在は、その目的の方向性が反対方向、すなわち神の創造目的の方向に転換されれば、その存在自体はそのまま存続しながらも、同時に悪が消滅するのです。

これは非常に重要な視点です。悪が「実体」ではなく「方向性」であるならば、悪を根絶するとは、存在を消し去ることではなく、目的の中心を神へと転換することを意味します。

そのとき、存在は残りながら、悪という結果が消滅するということが起こり得ます。

この意味で、「統一原理」（『原理講論』）は「悪の終焉」を否定していません。

ただし、それを存在論的消去ではなく、目的論的転換として理解しているのです。

4. 復帰摂理とは「方向転換の歴史」である

この善悪観に立つとき、復帰摂理の意味も明確になります。

復帰とは、墮落した世界を一度壊して作り直すのではなく、同じ世界、同じ人間を用いながら、サタンの目的を指向する方向性を神の創造目的へと転換していく過程です。

その究極的な完成が「地上天国の建設」として理解されるのです。

これは、イエスが弟子たちに教えた「御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。」（マタイによる福音書 6 章 10 節）という祈りとも対応しています。

神の意志が地上において完全に実現する状態、それが復帰摂理の到達点として聖書全体が指し示す未来像です。

ここでは、悪なる世界が消滅するのではなく、世界そのものが目的の転換によって善へと復帰するという、非常に動的かつ歴史的な救済像が描かれています。

5. 結論—善悪を「方向性」で捉える視点がもたらす統合

このように見てくると、「統一原理」の善悪観は、多神教的二元論のように「善と悪が永遠に対等に並立する世界」でもなく、単純な一神教的理解のように「悪なる存在がすべて消滅する世界」でもありません。

それらを超えて、善悪を「目的指向の違い」として再定義することによって、

悪の終焉と存在の連続性を同時に成立させる視点を提示しています。

これは、本シリーズで扱ってきた「世界観の違いが人生を決定する」というテーマを、さらに深い次元で裏づける補足的理解と言えるでしょう。